

第55回 中部化学関係学協会支部連合秋季大会  
(中化連報告)

中部化学関係学協会支部連合は、文字どおり、化学に関連する学協会の中部支部、東海支部の連合であり、中部化学関係学協会支部連合協議会あるいは中部化学関係学協会支部連合秋季大会は、中化連の名で親しまれています。第55回となる中化連は名古屋工業大学が担当しました。名工大で中化連を開催するのは、2012年以來のことになります。筆者は光応答性のタンパク質であるロドプシンの研究者ですが、ロドプシン分野における国際会議の実行委員長を2022年、主要学会である生物物理学会の年会実行委員長を2023年に務め、すべてを終えたという充実感に浸る中、降って湧いたように中化連の話が届きました。学科で最長老の教授が実行委員長をするらしい、ということで実行委員長をお引き受けすることになりました。

今回の開催にあたって、名工大で化学に関わる研究を行っている先生方を実行委員にお誘いしたところ、50名を超える先生方に加わっていただきました。研究分野も顔ぶれも多彩であり、まさしく化学の持つ幅広さや多様性を示すものであると実感しました。そして古谷祐詞先生、北川慎也先生、山村初雄先生に庶務幹事をお引き受けいただき、2024年11月2日(土)と3日(日)に名工大キャンパス内で開催することを決めました。開催

にあたっては、前回、中化連を開催された三重大の先生方からノウハウを丁寧に教えていただき、3月から5回の実行委員会を経て当日を迎えました。

看板となる総合講演は、日本化学会会長の丸岡啓二先生(京都大学大学院薬学研究科)による「合成後期段階における官能基化のための新規有機ラジカル触媒の設計」と名古屋工業大学の柴田哲男先生による「2050年を見据えたフッ素化学」でした。いずれも極めて質の高い有機化学の内容を、専門外の聴衆にもわかりやすくプレゼンしていただき、大きなインパクトを与えていただきました。演題数は総合講演も含めて385演題で、前回から58演題の増となりました。参加登録者も524名(一般188名、学生336名)と、前回から102名増えました。名工大の立地の良さが影響したのかもしれません。

運営のすべてを庶務幹事の古谷先生に仕切っていただく一方、実行委員長として筆者が唯一こだわったのが懇親会でした。名工大すぐ近くのビール園でクラフトビール飲み放題にする、という筆者の目標は無事実現し、158名の方が交流を楽しみました。新しく面白い共同研究が生まれるものと確信しております。

このような運営においては、財政が最も重要になりますが、実行委員の先生の



丸岡日本化学会会長による総合講演

頑張りにより115件もの支援(後援、寄付および広告掲載)をいただくことができました。その結果、過去に例のないほどの集金を達成することになり、次年度担当となる岐阜大学の先生方から困惑の聲が挙がるほどでした。しかしながら筆者が考えるに、様々な学会の持続可能性が懸念される中、将来に向けて健全な運営を続ける上でたまたま大きな黒字が出たのは良いことですし、今後も過度に無理をしない運営が望まれると思います。

盛会となった今回の開催にあたり、古谷先生、北川先生、山村先生をはじめとする実行委員の皆様、日本化学会東海支部長の錦織広昌先生(当時)、中部化学関係学協会支部連合協議会事務局の皆様には、多大なご尽力をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。次年度以降もますます盛況で実り多い中化連になることをお祈り申し上げます。

〔神取秀樹(名古屋工業大学)〕

© 2025 The Chemical Society of Japan